

# 新春しもつけ文芸 短編小説奨励賞



酒井 美音  
(幸福の科学 学園中2年)

突然ですが、私は恋をしています。でもそれは、してはいけない恋なのです。なぜなら、私が人間ではないから。

申し遅れました、私はきなこです。名前で大体想像がつくかと思いますが、私は猫です。そして私の好きな人は、飼い主の省君です。

二年前、私は今は違う家になりました。そこではいつも叩かれたり、蹴られたり、私は人間が怖くなりました。逃げだしました。遠い彼方に走って、途中でカラスに襲われたりして私はポロポロになりました。

私が倒れそうになった時に助けてくれたのが、省君でした。はじめはとも怖かったけど、省君は優しく私の頭を撫でて、温かいミルクをくれました。

その時から、私は省君のことが大好きになりました。省君が私を拾ってくれて二年が経った今でも、私は省君が大好きです。でも、どれだけ想っても私は人間ではないから、好きだと伝えられせん。私が省君のことが好きでも私は喋れないから、省君にこの想いは届きません。

ああ神様、私を人間にしてください。そう願った時、

「その願い、叶えてやろう」とどこから声がしました。

「わしは神様じゃ。天上界からおぬしを見ておつてな。わしの力でおぬしを人間にしてやろう。だが、人間になるには条件がある。

それは、おぬしの好きな人間と両想いになることじゃ。一日期限を与えよう。その間に想いを伝えなさい」

私は、急に眠くなってその場で寝てしまいました。起きると、私

は人間の体になっていました。

「え!? 話せるようになってる……」私は、人間の姿になるとも言葉も話せるようになっていました。その時、ドアが開く音がしました。

「ただいま」

省君が帰ってきました。私は、どうすればいいのかわからなくて、固まってしまいました。今の私の姿は人間だから、きっと省君は気づいてくれません。

「あれ、君誰!?」私はついに見つかってしまいました。

「私、きなこです」

「え? どういうこと?」省君が聞き返してきました。私は一旦冷静になって、省君に事情を説明しました。

「実は、目が覚めたら人間になって……でもほんとにきなこなんです」

「そうだったのか……信じがたいけど、たしかにきなこはいない。それにしても、きなこは人間になつたんだ?」

「それは……」私は、省君になんて言えはいいか分からなくて黙ってしまいました。

「分かった。何か事情があるなら無理に聞かないよ。きなこが言いたい時に言っていからさ」そう言って省君は優しく微笑んでくれて、私は思わず顔を赤くしてしまいました。

「とりあえず、お腹すいたしご飯でも食べるか」

省君は立ち上がって、「きなこもなんか食べる? 流石にキャットフードは無理だよな」と言っていて

「私はなんでもいいますよ」

「じゃあちょっと待って」そう言って省君は台所に行きました。

「これからどうしよう……」私がつぶやいていると、

「困っているようじゃな」またどこから声がしました。

「その様子だとまだ想いは伝えられてなさそうじゃな。まずはあやつとの距離を縮めなさい。デートといえは遊園地じやろう。そこで告白すれば成功間違いなしじゃ。頑張つてきなさい」そう言い残して神様らしき人の声は途切れ

ました。

「きなこ、作ったよ」省君が帰ってきました。

私は省君に焼き魚を作ってもらいました。ご飯を食べ終わった後、「まだ昼前だし、これから暇だな。きなこは何かしたいことがある

?」

「えっと、私遊園地に行きたいです」私は勇気を振り絞って言いました。

「じゃあこれから行くか」省君はそう言って、準備をし始めました。

私たちは早速遊園地に行きました。

今日は快晴で、私たちは思い切り楽しみました。メリーゴーランドやジェットコースター、他にもたくさん乗りました。

「いやー楽しかったな。時間が過ぎるのはあっという間だな」空はずでに赤く染まっています。

「そうですね」

「じゃあ、最後に観覧車乗ろうか」省君がそう言ってベンチから立ち上がりました。そうして私

ちは観覧車に乗りました。

「空、きれいだな。もう夕方だな」

「私、今日とっても楽しかったです」

「俺も楽しかったよ」

「あの、私、省君に伝えたいことがあるんですけど……」

「何?」

「私、省君が……いや、やっぱり何でもないです」

「そう? ならいいけど」私は省君に好きということができませんでした。私たちはそのまま家に帰りました。家に帰ると、省君はすぐに寝てしまいました。

私は眠れなかったため、ベランダに出て月を見ていました。

「私、あの時なんて言えなかったんだらう……」

私は、省君に想いを伝えられなかったことをとても後悔してしまいました。

私はふと、顔を上げて月を見ました。今日はきれいな満月で、月の周りには星が輝いていました。

「月、きれいだな」私がそうつぶやくと、

「早くしないと、猫の姿に戻ってしまうぞ!」

またあの声が聞こえて、私は思いました。人間でいられるのはあと少ししかない。早く省君に好きと伝えなければ、猫に戻ってしまう。

「何をしとる、早く想いを伝えなさい。おぬしは人間になりたいのだから?」

その言葉を聞いて、私は気づきました。

私は確かに人間になったかったです。そして人間になって、実際に楽しくて、省君ともたくさん話せました。けれど、本当に人間になつてしまつたらきっと後悔する気がしました。

猫として生まれて省君に出会ったのなら、猫の姿で省君と過ごそうと私は思いました。

「神様らしき人、私決めました」

「神様らしき人、私決めました」



撮影 下野写真協会・岡田富子

「神様らしき人ではなく、神様じゃ。まあいい、どうした」

「人間は確かに楽しかったです。けど、私は猫の姿で省君のそばにいたいと思います」

「そうか、ならばこれからも猫として生きていきなさい」

そうして、神様らしき人の声は聞こえなくなつて、私は操られたようにベッドに引き寄せられ、眠りました。目が覚めると、私は猫の姿に戻っていて、目の前には省君がいました。

「おはよう、きなこ。よく寝たね」

あれ? 私は何かがおかしい気がしました。省君は何の違和感もなく私の頭を撫でています。

私は気づきました。今までのことは私が見ていた夢だったので。けど、あれが夢だったとしても、私は大事なことに気づけました。

私が好きなのは人間です。私は猫。結ばれなくても、そばにいられるだけでいい。今世は猫として省君と一緒にいる。そして来世も、省君に出会ってそばにいたい。

今日も、お日さまの光が部屋に射しこんでいました。ただ今日は、なんだかいつもよりも温かくて、まるで、誰かが優しく見守つてくれているようでした。その安心感が心地よくて、なぜかなつかしく感じました。

私はまた眠くなって、お日さまの温かさに包まれながら、省君の腕の中で丸まって眠りました。



さかい・みおん 2007年生まれ。幸福の科学学園中2年。創作文芸研究部所属。新春しもつけ文芸に初めての応募で初入賞。